

2016年度 学術交流支援資金「海外の大学等との共同学術活動支援」報告書

研究課題名：SFCでのライターズ・ワークショップの実施と方法的進化

大学院プロジェクト名：インターリアリティ

担当：井庭 崇（総合政策学部）

Abstract

パターン・ランゲージの分野では、作成されたコンテンツ（パターン等）をコラボレーティブによりよくするための対話の場「ライターズ・ワークショップ」が行われている。本プロジェクトでは、このライターズ・ワークショップの方法を、パターン・ランゲージ分野に応用したRichard Gabriel氏（Researcher IBM Researcher）とカンファレンス運営トップのJoseph Yoder氏（Hillside Group）をSFCに招聘し、研究プロジェクトや授業で解説をしてもらうとともに、SFC生向けに本場のライターズ・ワークショップを実施していただいた。また、ライターズ・ワークショップの方法を進化させるための議論も行った。

研究の背景と目的

1970年代に建築分野で提唱されたパターン・ランゲージの方法は、1980年代後半にソフトウェア開発の分野に取り入れられ、多くの研究・実践が行われてきた。それ以来20年以上にわたり、パターン・ランゲージのカンファレンスが行われてきた。現在でも毎年、北米、ヨーロッパ、北欧、南米、アジアなど、世界のあちこちで開催されている。

それらのカンファレンスでは、通常の学会発表とは異なる、とてもユニークな方法がとられている。口頭発表をするかわりに、論文として提出されたパターンをみんなでよりよくするために対話する「ライターズ・ワークショップ」（Gabriel, 2002）が実施される。ライターズ・ワークショップでは、著者が論文について語るのではなく、著者以外の参加者が、その論文をよりよくするための話し合いをする。車座になって、1論文あたり約1時間半の時間をかけ、カンファレンス期間中に6～8本の論文を、同じメンバーのグループで話し合っていく。このようなライターズ・ワークショップが、これまで20年以上、パターン・ランゲージの世界では行われてきた。なお、このライターズ・ワークショップという方法は、もともと小説や詩などの創作（creative writing）の分野で行われてきた方法であり、他の研究や創造活動にも応用できる。本プロジェクトでは、このライターズ・ワークショップの方法を、パターン・ランゲージ分野に応用したRichard Gabriel氏（Researcher at IBM Research）とカンファレンス運営者のJoseph

Yoder氏（President of the Hillside Group）をSFCに招聘し、研究プロジェクトや授業で解説をしてもらうとともに、SFC生向けに本場のライターズ・ワークショップを実施していただく。さらに、ライターズ・ワークショップの方法を進化させるための共同研究を行った。



実施報告

2017年9月に、このライターズ・ワークショップの方法を、パターン・ランゲージ分野に応用したRichard Gabriel氏（IBM Researcher）とカンファレンス運営者のJoseph Yoder氏（Hillside Group）をSFCに招聘した。両氏には、SFCで授業「パターンランゲージ」(GIGA)、「井庭研究会」で講演をしていただいたほか、「総合政策学」(GIGA)のラーニング・パターンを用いた対話ワークショップにも参加いただいた。また、学外で一般参加者向けに、井庭研の学生とともに、ライターズ・ワークショップに関する講演・ワークショップを実施した。井庭研メンバーは、逐次通訳をするとともに、ライターズ・ワークショップのモデレーターとして活躍した。さらに、両氏のSFC滞在中は、ライターズ・ワークショップの方法などについて、井庭研究室の学生たちと研究交流を行うとともに、研究の指導にも貢献いただいた。



